

距離に所在する。会津地方では、全体構造と遺構変遷が判明している数少ない方形館跡の1つであり（（財）福島県文化振興事業団2002）、下高額館跡とは、一定の併存期間がみられる（麻生館Ⅰ～Ⅱ期：下高額館Ⅱ～Ⅲ期）。ここでは、その間を対象に相違点を要約する（図88）。

- A) 平面形に違いがみられ（縦長長方形－横長台形）、面積は近似している（5,300㎡－5,000㎡）。堀の幅・深さは、下高額館跡の方がしっかりと土塁を伴い、防御的性格が強い。
- B) 麻生館遺跡は、主殿がほぼ中央にあり北半部が空閑地なのに対し、下高額館跡は、主殿を含み堀・土塁の手前まで建物配置が行われる。また麻生館遺跡は、主殿の西・南側に直列の建物配置が行われていない。
- C) 麻生館遺跡は、主殿に南面して池が設けられず、広い空閑地になっている。しかし、報告書ではここに庭園が営まれていたと推定されており、東側未調査区に池の存在した可能性も考えられる。その場合、両者は類似した構造となる。
- D) 麻生館Ⅱ期・下高額館Ⅱ期の主殿は、平面形・構造が比較的近似する。また、堀外部に建物配置が行われる点も一致している。

以上から両館跡は、全体規模、主殿の平面形・構造、堀の外部に建物配置が行われる点が類似する一方で、内部の建物配置にはかなり違いが認められた。また麻生館遺跡は、遺物の量が極端に少ない。それらが何に起因するものなのか、今後の課題である。

## 第7節 文献史料と発掘調査成果の整合性

下高額館跡には、造営年代・城主名の記録された文献史料が残っているが、その信憑性を、疑問視する向きもあった。次に、発掘調査成果との整合性をみていきたい。

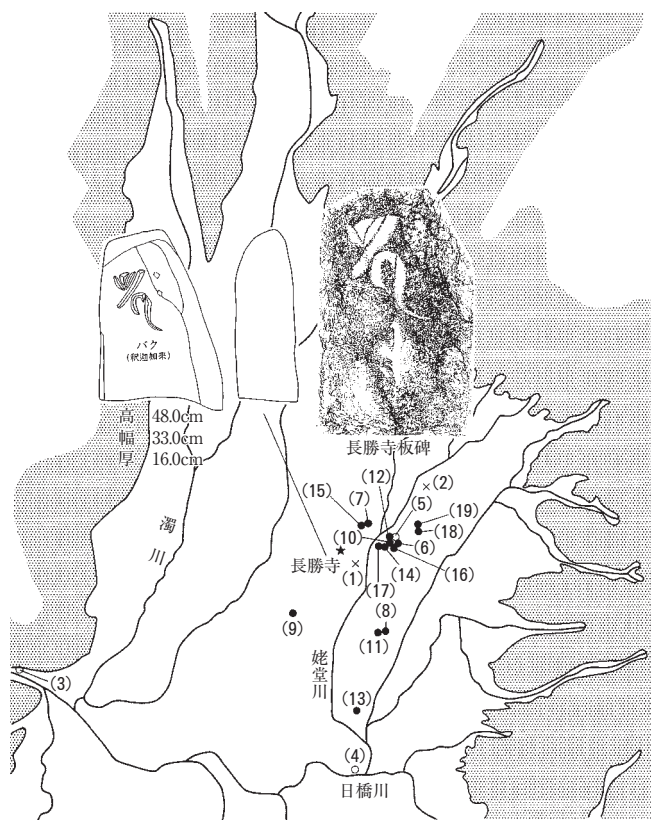
### 文献史料にあらわれた下高額館跡

下高額館跡には、以下の関連記録が認められる。

- A：『新編会津風土記』 至徳年間（1384～1387）、耶麻郡十二箇村を領有する蘆名氏家臣の渡邊左京進長勝が、同郡下高額村に館を構える。また、至徳元（1384）年には、村内に自らの名を寺号として長勝寺を建立した。
- B：『貞山公治家記録』 天正17（1589）年、葦名氏旧臣の十二村助左右衛門が、伊達政宗から会津北方十二村を安堵された。

補足すると、Aの長勝寺は下高額村に現存し、境内には板碑が残っている。板碑は、年号部分が欠損しているが、至近距離に14世紀後半（Ⅳ期：1361～1396）の板碑群がみられ（図89－6～19）、それもほぼ同じ頃のものとみられる（柳内壽彦2000）。この年代観は、史料に記録された長勝寺の建立年代（1384）と合致する。

また、Bの「十二村」は、Aの「十二箇村」と同一で、十二村助左右衛門も、下高額村に館を構



番号	西 暦 (年 号)	所 在 地
(1)	1297年(永仁5年3月11日)	喜多方市豊川町高堂太字村中
(2)	1301年(正安3年7月23日)	喜多方市熱塩加納町熱塩字熱塩795
(3)	1333年(正慶2年)	喜多方市高郷町揚津字赤岩
(4)	1349年(貞和5年7月3日)	喜多方市塩川町吉津字沖
(5)	1352年(観応3年3月9日)	喜多方市関柴町豊芦字村中1711
(6)	1361年(延文6年2月9日)	喜多方市関柴町豊芦字村中1735
(7)	1361年(延文6年2月)	喜多方市関柴町西勝字三島
(8)	1363年(貞治2年4月28日)	喜多方市塩川町三吉字北屋敷
(9)	1364年(貞治3年8月1日)	喜多方市豊川町一井字家北
(10)	1364年(貞治3年8月17日)	喜多方市関柴町豊芦字村中
(11)	1367年(貞治6年3月18日)	喜多方市塩川町三吉字北屋敷
(12)	1367年(貞治6年8月13日)	喜多方市関柴町豊芦字村中
(13)	1367年(貞治6年8月28日)	喜多方市塩川町小府根字仲田
(14)	1368年(貞治7年4月2日)	喜多方市関柴町豊芦字村中
(15)	1369年(応安2年3月11日)	喜多方市関柴町西勝字三島
(16)	1369年(応安2年3月11日)	喜多方市関柴町豊芦字村中
(17)	1376年(永和2年7月)	喜多方市関柴町豊芦字村中
(18)	1395年(応永2年9月27日)	耶麻郡北塩原村大字北山字柿木田
(19)	1396年(応永3年)	耶麻郡北塩原村大字北山字前畑

×Ⅱ期：1287～1308年 造立年号のある板碑の所在地  
 ○Ⅲ期：1312～1353年  
 ●Ⅳ期：1361～1396年

図89 周辺の板碑

えたと推定される（喜多方市史編纂委員会1995）。渡邊氏と十二村氏の関係は不詳であるが、同一系譜である可能性が指摘されており（喜多方市史編纂委員会1995），十二村家は，現在も館跡の南東隣接地に断絶することなく続いている。

今回，判明した館の存続年代（14世紀後半～17世紀初頭）は，その2名に関する文献記録と一致した。したがって，記述内容の信憑性と共に，両氏の連続性がほぼ裏付けられたと考えられる。

なお，文化12（1815）年の村絵図には，館跡が水田へ帰し，十二村家は現在地に移動していた様子が描かれている。それでも，館の跡地には「北屋敷」の小字名が確認され，この時点ではまだかつての存在が認識されていたようである。しかし，明治15（1879）年の丈量図ではその地名も消え，地域住民から館の存在は忘れ去られていた。

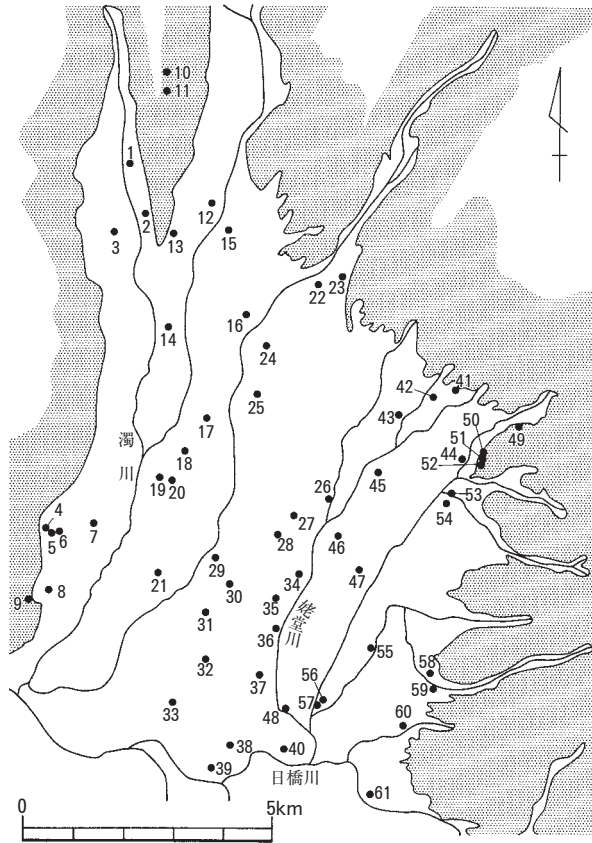
## 歴史的背景

最後に，歴史的背景を探ってみたい。

図90・91は、『福島県の中世城館跡』（福島県教育委員会1988）を基礎データに，平地城館跡の分布と変遷を整理したものである。これをみると，下高額館跡の所在する会津盆地北部には，60箇所を超える平地城館跡を確認することができ（図90），それらの造営場所は，盆地西部から東部へ順次移動して，最終的には全体に拡散した動きが読み取れる（図91）。

そのうち，下高額館跡が成立した14世紀後半に焦点を当てると，姥堂川流域の狭い範囲に造営場

## 第7節 文献史料と発掘調査成果の整合性



遺跡名	文献	城主・年代など
1 (添田館)		
2 鷲田館		
3 (譲屋館)		
4 慶徳城	A・B・C・E	天正年中(1573-1591)、蘆名の臣、慶徳善五郎が住む
5 新館	F	天正年中(1573-1591)、武藤和泉守が築く
6 荒神館		
7 谷地ノ城	F	承安元年、河内守吉実が住んだという
8 新宮城	A・B・C・K	建暦2年(1212)、新宮時連が築いたという
9 駿河館	B・K	永享の頃(1429-1440)、西海枝駿河守が築く
10 (針生館)	A・C	建長6年(1254)、山川七良重隆が築く、その子孫針生氏が住む
11 (畠中館)		
12 (吉志田館)	A・B・C	蘆名の臣、瓜生筑後重次が住む
13 青山城(東城)	A・B・C	加納庄領主、佐原氏(加納殿)が住んだという
14 新助屋敷	A・B	弘長の頃(1261-1263)、真壁備中元勝が築く、天正期、穴沢新助が住む
15 (高畠館)	A・B	伊沢権頭後行のち神保小次郎長保が住んだという
16 (下岩崎館)	A・B・C	天福の頃(1233)、飯島筑後信之が築いたという
17 坂井館	A・B・C	元龜・天正の頃(1570-1591)、小荒井阿波が住む
18 (塚原館)	B	天正期(1573-1591)、蘆名四天の宿老富田美作の嫡子富田将監が住む
19 (太郎丸西館)	A・B・C	永禄11年(1568)に、太郎丸河内守盛次が築いたという
20 (太郎丸東館)	B	天正(1573-1591)の時代、太郎丸掃部が住む
21 (長尾館)	A・B・C	新宮五郎左衛門宗連が築いたという
22 (上岩崎館)	A・B・C	大永の頃(1521-1528)、遠藤助兵衛(大隅)が築く
23 (大沢館)	B	蓮沼信濃某が住んだという

文献：A会津古呈記 B新編会津風土記 C会津鑑 D会津旧事雜考  
E耶麻郡誌 F慶徳村旧記  
G伊達治家記録 H伊達天正日記  
I蘆名家分限録 J蘆名家御旧臣見分録  
K新宮雜業記 L異本塔寺八幡宮長帳  
M檜原軍物語

遺跡名	文献	城主・年代など
24 (稲村館)	B	天正の頃(1573～1591)まで、蘆名小太郎盛保が住むという
25 (小田付館)	A・B・C	佐瀬木和種常、五十嵐善次郎冒勝が住む
26 (中明館)	A・B	菅沼伊賀某が住んだという
27 (下勝館)	B	大原伊賀守某が住んだという
28 (下高額館)	A・B・C	至徳の頃(1384～1386)、渡辺左京進長勝が住むという
29 (菅井館)	A・B・C	康安2年(1362)、三橋太郎義通が築いたという
30 (渋井館)	A・B・C	天文9年(1540)、池田備中政宗の二男、勘次郎俊甫が築く
31 柴城	A・B・C・I	応安4年(1371)、柴城民部重行が築く
32 沖館	B・C・J・N	山口沙耶道光が住む
33 貝沼館	B・J	三橋太郎義道が康安2年(1362)に築く
34 (太田館)	B	天正年中(1573～1591)、進沼備中某が住んだという
35 鏡ヶ城	A・B・H	至徳元年(1384)に平田大隅が築いたという
36 新井田館	A・B・J	建仁3年(1203)に新井田太良重国が築き、のち田辺左衛門義秀が住んだ
37 上江館	B	粟村彈正清政が天正年間(1573～1591)住む
38 下遠田館	A・B・C	三橋備前重定、二男刑部重治が住む
39 新屋敷	B	
40 小十郎館	B	天正17～18年に片倉小十郎(1589～1590)が築城果たせず、長井に移る
41 赤館	B	網取城主、松本勘解由の臣中ノ目阿賀が住んだという
42 新井館	B	松本勘解由の臣、新井善五郎が住んだという
43 一盃館	B	松本勘解由の臣、一盃大輔が住んだという
44 山口屋敷	A・B・C	天文年中(1532～1554)、山口弥太良実村が築く、羽曾部を氏とした
45 (中里館)	B	佐藤河内某が住んだという
46 (布流館)	B	手代木某が住んだという
47 南館	B・D・L	中ノ目城、中ノ目式部大夫盛光が天正年中(1573～1591)住む
48 (別符館)	A	佐野平内エ門が住む、別符は荘園関連地名
49 (佐原館)		
50 (館)		
51 (館)		
52 (館)		
53 (高柳北館)	A・B	野部清吾某が住んだという
54 (高柳南館)	A・B	坂井雅楽が住んだという
55 常世館	B・L	常世大炊助が永禄年間(1558～1569)住む
56 丹波館	A・B・C	上窪村櫓、宇都美丹波が住む
57 (上窪南館)	B	葛石右馬介の館か
58 南屋敷	A・B・C	間鍋備中が住む
59 小滝館	A・B・J	小滝右衛門慰義直が徳治年間(1306～1307)に築く
60 深沢館	B	
61 金川館	B・C・J	石井修理維人が永仁年間又は永保年間に築くという

図90 平地城館跡の分布 (1)

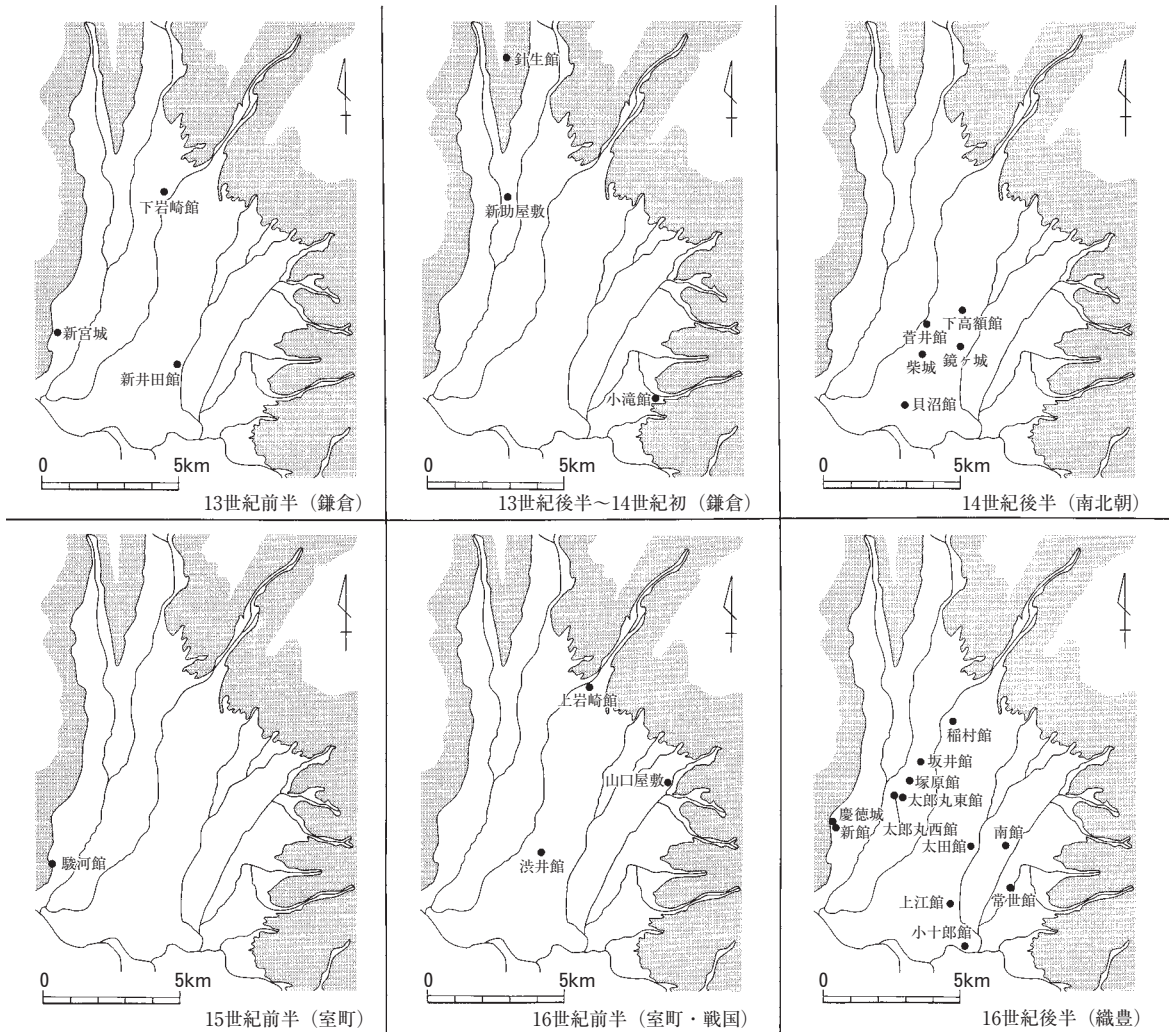


図91 平地城館跡の分布 (2)

所が限定され、鏡ヶ城跡の半径3km以内に、下高領館跡・菅井館跡・柴城跡・貝沼館跡が集中することが指摘される(図90-28・29・31・33・35)。したがって、一帯に何か特別な事情が発生したことが推測され、このことは、ほぼ同位置で14世紀後半(1361~1396)の板碑が集中的に造立された現象と符号している(図89)。

この14世紀後半は、ちょうど草名直盛が会津へ下向した頃である(佐藤健郎1986)。また、鏡ヶ城は草名氏四大家老の筆頭、平田氏累代の居城とされ、他の4城館跡に比べて格段に大きな規模を備えている(塩川町教育委員会2001)。そうすると、下高領館跡は、会津地方における草名支配が本格化する中で、鏡ヶ城の支城の1つとして成立した可能性が指摘できるのではないだろうか。もちろん、この仮説は文献に依拠したものであり、今後、批判的に検証されなければならない。

また、館Ⅱ期の廃絶状況にも注目したい。これは、16世紀後半という戦国時代末期の年代を考慮すると、奥羽仕置に伴う破却(伊藤正義2001)の可能性も選択肢の1つにあげられる。

3次調査以降で、さらに検討材料が増えることを期待してまとめに代えたい。(菅 原)